

一 修辭的思考の陶冶を視野に入れた言語技術教育

私は、言語技術教育の目的を教師と学習者の言葉遣いの精度を高めていくことを通して緻密な思考に培うこと、と考えている。要するに、教師と学習者が場と状況に応じて臨機応変で自在な言葉遣いをきめ細やかに駆使していくことのできる能力の育成を目指しているということである。

このような考え方に立つならば、言語技術教育は〈修辭的思考の陶冶〉という行き方を視野に入れていかなければならなくなるはずである。修辭的思考とは、言葉を論理的（正確に推論・論証すること）に駆使するだけでなく、効果的に（説得的にと言いつてもよい）駆使することである。要するに、レトリカルな思考の陶冶ということである。

なお、私の言語技術教育に関する考え方については、日本言語技術教育学会のホームページに「基調提案」と「基調提案」に関する解説・補説」として詳しく述べている。また、『言語技術教育』第27号においては「言語技術教育は修辭的思考の陶冶を視野に入れるべきである」という論考を執筆している。共に参照して頂ければ幸いである。本稿では、本大会の模擬授業で用いられる三つの教材について、修辭的思考の陶冶という観点から、書き手が用いている〈発想〉という言語技術と、その言語技術を読み取るための言語技術を中心に論述しておくことにする。

〈発想〉とは、修辭学という学問体系の三部門（〈発想(invention)〉「配置(disposition)」「修辭(elocution)」）の第一部門に該当する。この〈発想〉を筆者（書き手）の言語技術とみなしておく。

本大会で使用される教材はいずれも説明的文章教材である。従来、この説明的文章教材の指導については、段落構

造や文章構成の形式的側面を辿らせたり、内容面からは段落の要点読みに終始するといった実践が多かった。

一部に、『筆者の工夫を評価する説明的文章の指導』（森田信義著、一九八九年、明治図書）といった提案や「筆者の意図に遡上していく読みのあり方」（植山俊宏の論考における指摘、『国語科教育学の成果と展望』二〇〇二年、明治図書）といった提案もあったが、実践現場への定着は残念ながらほとんど見られない。

説明的文章の場合、まず問題とすべきは、筆者がなぜその文章を書くに至ったのか、という文章制作の動機・目的である。そして、この問題と連動して取り上げなければならぬ問題は筆者が取り上げた題材への着眼という点である。筆者にはその取り上げた題材への驚きや発見があったからこそその文章を書こうとする動機・目的が生じたはずである。こうした問題に目を向けた実践が残念なことにほとんど見られない。

そこで私は、筆者の独自のものの見方・考え方に学習者が自発的に気づいていくような指導の観点を提案してみようと思う。筆者（＝書き手）の〈発想〉という観点である。

私は〈発想〉を、さまざまなもの・ことの中から価値ある独自の発見を行うこと、独自の着眼点（＝目の付け所）を持つこと、と規定している。こうした〈発想〉という心的な過程は、主要には、①文章制作の動機・目的、②価値ある独自の題材への着眼、ということが出来る。これらを文章中から目に見える形として取り出すには、①文章題（＝題名）の付け方、②題材を効果的に展開していくための説明の仕方、印象づけるための記述の仕方、といった筆者が用いている言語技術の形で押さえていくことが可能である。

以下、三つの教材によって筆者が用いている〈発想〉という言語技術を具体的に取り出して試してみよう。

二 「すがたをかえる大豆」に用いられている〈発想〉という言語技術

この文章を制作するに至った筆者の動機・目的は、「すがたをかえる大豆」という題名に端的に表れている。大豆という植物に昔から人間がさまざまに手を加えて美味しく食べられるように工夫を凝らしてきたのである。その工夫の中には、元の大豆の姿を想像することのできないような加工の手が加えられているものもある。そうした先人の知恵

に対する筆者の驚き・発見がこの文章を書くこととした動機である。そして、こうした先人の優れた知恵を子ども達にも気づかせるような印象づける記述の仕方が題名に用いられている。「すがたをかえる」という擬人法である。大豆自身が自ら姿を変えたのではなく、昔の人々が手を加えて大豆をさまざまな姿に変えてきたのだと、子ども達の自発的な発見に導いてやれる観点、それが筆者の使用した「すがたをかえる大豆」という擬人法の言語技術なのである。

なお、この「すがたをかえる大豆」という題名は、そのままこの文章の題材(Ⅱテーマ)でもある。この題材を効果的に展開していくために、是非とも取り上げるべき言語技術は、接続語による〈例示の仕方〉という言語技術である。つまり、最初に③段落目で「いちばんわかりやすいのは」と、誰にでもすぐに気づける分かりやすいものから例示している。次に、だんだんと気づきにくい意外な「くふう」を例示していく。「つぎに」「また」「さらに」「このほかに」といった具合に、次第に意外な大豆食品の作り方が紹介されている。

以上の二点の言語技術を子ども達に自ら気づかせていくような指導が行われることを期待したのである。

三 「ウミガメの命をつなぐ」に用いられている〈発想〉という言語技術

この文章を制作するに至った筆者の動機・目的は、やはり「ウミガメの命をつなぐ」という題名に端的に表れている。しかも、この題名は「すがたをかえる大豆」という題名の場合と同様に、この文章の題材(Ⅱテーマ)ともなっていることが理解できよう。この文章で取り上げられている「ウミガメ」という素材は、「ぜつめつのおそれがある動物」なのである。この貴重な動物の「命をつないで」いくための「名古屋港水族館の取り組み」の様子を紹介するのがこの文章の目的となっている。

また、筆者は、名古屋港水族館の飼育員であり、ウミガメの飼育や研究に携わっていると筆者紹介にある。このことから、筆者は水族館では、見学者に「さまざま生き物の姿やくらしぶりを見せるという役わり」の他に、生き物の「命をつなぐ」ために一般の人々には気づいてもらえないような工夫と努力をしているのだということ伝えていたいという動機・目的もあったことが理解されるであろう。

次に、「ウミガメの命をつなぐ」という題材を効果的に展開していくための主要な言語技術を三点取り出しておこう。一点目は、**[1]**段落にある「…どのようなわけがあったのでしょうか。」という〔設疑法Ⅱ問いかけ法〕という言語技術である。「わけ」という語句使用も一つの言語技術と見なしてよい。「わけ」は「細かい事情、どうしてそうなるか」という筋道」といった意味の広がりをもった語句である。このような語句の使用にも筆者の言語技術の一端は見出せる。同様に、**[17]**段落の「…どのような生活をしているのでしょうか。」という設疑法にも着目しておきたい。この設疑法は、ウミガメが「たまごを生む」までの生活にその「命をつなぐ」仕事が大きく関わっていることを表している。そして、このことは、**[11]**段落にあるウミガメの「たまごの数と生まれた子ガメの数」を表した表の意味することとも連動しているのである。

四 「幻の魚は生きていた」に用いられている〈発想〉という言語技術

この文章を制作するに至った筆者の動機・目的は、冒頭の**[1]**段落にある「絶滅したはずのクニマスが生きていた」という奇跡に近い事実を報道する新聞の見出しを引用した言葉から窺える筆者の驚きと喜びにある。その驚きと喜びを読者に伝え共有したいということである。この文章の題名「幻の魚は生きていた」は、新聞記事のトップ見出しをそのまま用いて、その驚きと喜びをストレートに伝えようとする言語技術と見なせる。「幻の魚」という語句の使用も筆者の衝撃の大きさを伝えるための言語技術と見なしてよい。

次に、「幻の魚は生きていた」という題材を効果的に展開していくための主要な言語技術を取り出しておこう。

この文章における題材の効果的な展開の方法として、「幻の魚」クニマスが生きていたわけを解き明かしていく〈謎解き〉の手法が挙げられる。そして、この手法を支えている言語技術に本文中に用いられている四箇所の〔設疑法Ⅱ問いかけ法〕がある。しかも、〔問いかけ〕に対する答えは単純に示されているわけではない。魚類学者としての研究的な〈推論・論証〉の過程が丁寧に論述されているのである。この〈推論・論証〉の過程そのものがこの文章の題材（Ⅱテーマ）を効果的に展開している言語技術とみなしてよいだろう。